

日本科学哲学会第 38 回大会ワークショップ I I

科学的哲学と科学哲学

－30-50 年代北米でのプラグマティズムと論理実証主義との交錯－

概要

今世紀の科学哲学の形成期に於いての二つの大きな要素として、アメリカのプラグマティズムとヨーロッパの論理実証主義とを挙げることができるであろう。1930 年代の政治的状況の結果として、後者の担い手としてのウィーン学派の主要メンバーは、アメリカへと移住し、それ以後アメリカでの科学哲学展開においての中心的役割を果たすこととなった。それと軌を一にするかのように、プラグマティズムはアメリカ哲学界で勢力を失うに至ったが、周知の如く、その後の数十年間で、論理実証主義も衰退し、忘れ去られるに至った。そして、現在に於いては、論理実証主義について歴史的観点からの再評価がなされつつある一方、プラグマティズムは、現代の哲学的視点からの再発見・再評価の対象となっている。しかしながら、この両者間の関係については、ほとんど関心が払われてはいない。本ワークショップは、1930 年代から 1950 年代にかけてのアメリカでの両者の交流・交錯の状況を、カルナップ、デューイ、モリスに焦点をあてて概観・検討する。先ず、カルナップとデューイのそれぞれが、どのような科学哲学観を持っていったかを、それぞれ、齋藤直子氏、中村正利氏に発表していただく。その後、蟹池陽一がカルナップとモリスとの交流について発表し、総括討論へと移る。

(オーガナイザー：蟹池陽一)